

『私の関ヶ原』写真コンテスト2018春・夏

審査員講評



浅井 慎平

あさい しんぺい

写真家

「関ヶ原」という名称に「私の」と付けられた写真コンテスト、どんな作品が寄せられたのか、想像することは難しかった。

けれども、応募された写真作品は、それを軽々と抜けていたように感じられた。

人々はそれぞれにこころの何処かに「関ヶ原」を持っているのだ、とあらためて感じた。

応募作品の数だけの思いがあって、選考には、さまざまな議論が飛び交った。

とても意義深い写真コンテストだと、感動を持った。

応募された作者たちにとっても、「関ヶ原」に対する想いの深さを考えるいい機会だったと想像できる。

入賞作品はそれぞれに工夫があり、思索の経緯が読み取れ、興味深いものがあつた。

今後の進化が楽しみだ。

『私の関ヶ原』写真コンテスト2018春・夏

審査員講評



クリス・グレン

くりす・ぐれん

ラジオ DJ

関ヶ原古戦場グランドデザインフォローアップ
懇談会委員

一目見るだけで「関ヶ原」とわかるものもあれば、「この風景は、本当に関ヶ原!？」と驚くようなものもあり、数えきれないくらい関ヶ原を訪れている僕にも新しい気づきを与えてくれる作品が数多くありました。

今回のテーマは「私の関ヶ原」。つまり 384 作品すべてに、それぞれ撮影した方々の「関ヶ原」への想いがつまっている。すべてが、心のこもった芸術作品であると感じました。

かつては、激しい戦いのあった「関ヶ原」ですが、今、こうしてみなさんの作品を拝見すると、改めて平和であることの有り難さを感じます。

特に「岐阜県知事賞」を受賞した作品は、戦いがあった頃の風景を語り継ぐ「関ヶ原」と、現在の平和な空気感が漂う、のどかな「関ヶ原」が、うまく表現された作品だと感じました。

次回の秋・冬も楽しみです。

『私の関ヶ原』写真コンテスト2018春・夏

審査員講評



前田 真二郎

まえだ しんじろう

映像作家

情報科学芸術大学院大学[IAMAS]教授・
附属図書館長

審査においては、様々な「関ヶ原」を選ぶことを目標にしました。

けれど、着眼点だけを優先することはせず、結果的には写真としての表現力も重視したように思います。

審査員4名の話し合いから岐阜県知事賞には、微妙な時間帯の蕎麦畑の空気感を捉えた「光を待つ」を選びました。

写真を撮ろうとする時、何を撮ろうかと考えがちですが、この作者はきっとその場の光、時間を定着しようとしたのではないのでしょうか。

まさに私だけが出会った／見つめた「私の関ヶ原」だと感じました。

蛍の乱舞や、絶滅危惧種であるヒメコウホネの花に着目した作品も印象に残っています。

豊かな自然環境を残す関ヶ原について写真を通して知ることができました。

『私の関ヶ原』写真コンテスト2018春・夏

審査員講評



光田 由里

みつだ ゆり

美術評論家

天下分け目の関ヶ原は知らぬ人のいない地名だが、当地は遺跡や遺構があるというよりも、古戦場の歴史が地霊のように伝わる場所としてある。

カメラを持って「私の関ヶ原」を探そうとするこのコンテストは、自由に関ヶ原を読み込み、想像し、関りを作り出す積極的な写真の舞台になるだろう。

岐阜県知事賞の「光を待つ」は、ミルキーな靄のかかる蕎麦畑の向こうに、遠く立つ1本の幟のぼりを中央にとらえた写真で、いにしへの侍たちのあやなす思いが溶け込んでいるような光の広がりが印象的である。

優秀賞の「我此所に有り」は、石碑の粗い質感につやのある小さな蛙をみだして、過去と現在の接点に差す一筋の木洩れ日が強い効果を生んでいる。「のろし場の参道」の爽やかな竹林の道もまた関ヶ原の重要な歴史的時間を今も確かめようとする私たちの思いを伝えてくれる。